

アストンの「神道」著作に関する予備的研究
(その2) 神道論試訳

A Preliminary Study of Shinto Articles by W.G. Aston
Part 2: A Translation of Shinto (TPJSL)

片山 博

KATAYAMA Hiroshi

Abstract: A translation of the body portion of Aston's *Shinto* was presented in volume 4 of this Bulletin. The question-and-answer session following the presentation of Aston's article and the original footnotes are translated here, together with some comments of the author. This concludes an attempt to translate the third article on *Shinto* by W.G. Aston, which was presented in volume 7 of the *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London in 1908*. Three articles on Shinto, both the originals and the translations, will be compared in full detail for identifying Aston's Shinto thoughts in the near future.

Keywords: Shinto, Japanese religion, Japanese culture

はじめに

『融合文化研究』第4号に掲載したアストンの「神道」論文翻訳に引き続き、同論文発表直後に交わされた参加者による「討論」の部分及び原著の脚注部分を翻訳する。前回翻訳したのは、ロンドン日本協会雑誌第7巻（Shinto by W.G. Aston in Volume 7 in *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, pp. 340-351）の論文本体をなす340ページから349ページ11行目までの部分で、今回は、349ページ12行目から351ページ43行（最終行）までの討論の部分と、340ページと341ページに各々一箇所付された脚注部分の翻訳である。なお、前回の翻訳中、*Transactions and Proceedings of the Japan Society, London* の日本語誌名を「ロンドン日本協会紀要」としたのは、*Transactions of the Asiatic Society of Japan* 「日本アジア協会紀要」からの類推による誤

りであることが判明した。今回の翻訳に当たって資料を整理していた際に、雑然と積み重ねたファイルの中から創刊号の表紙のコピー「倫敦日本協會雑誌一之巻」を発見し、「ロンドン日本協会雑誌」が正しい誌名であると分かった次第である。

W . G . アストン 「神道」 『ロンドン日本協会雑誌』 7 巻、1908 .

討論

討議を始めるに際して、唯今聞き終えた学術的な論文には出席者の意見を伺いたいいくつかの興味深い点が含まれており、もし非会員の出席者も居られるなら心からの参加を請う、と議長が発言した。当夜の参加者の中には、パリ日本協会会長ベルテン伯爵の出席があった。彼もその会合で活発な議論が行われることを期待していたに違いない。

日本協会の会員であるベルテン伯爵は、英語でまとまった話しができるようになるには、かなりの期間ロンドンで過ごさなければならないだろう、と言う口実を述べて退席した。

日本協会の会員であるケリー・ホール氏は、当夜聞き終えたアストン氏の筆になるこの論文は、氏の長年にわたる刻苦勉勵の結果を分かりやすい形に凝縮したものであって、この主題に関して最も進んだ知識を明示している、と語った。当該論文が日本人の初期の宗教的発達段階に光を当てたことのほかに、コントやハーバート・スペンサーによって規定されている我々の時代精神に関しても重要な意義を持つものだ、とホール氏は考えた。

単なる数や形の研究における揺籃期から、人間の研究におけるその最高の展開をも含めた科学の進展の跡を辿った後に、ホール氏は、コントの「新科学」とハーバート・スペンサーの「社会学」的観点で解釈されている宗教の起源に関して、学説を敷衍して述べた。スペンサーは、宗教は幽霊、すなわち、死者の亡霊を崇拜することに始まり、時が経つにつれて崇拜されるべき亡霊の数が減少して、終に単一神の觀念に到達した、との立場をとった。

一方、コントは、宗教の起源はむしろ自然崇拜の一形態に存し、全ての宗教の発達段

階において、自然物であれ人工物であれ全ての外界物が、人間自身の靈魂に類似した魂によって生命を吹き込まれていると考える一段階が必要であった、と信じた。古代の人間は、自然界のあらゆる作用が生命に寄与するとの観念を抱いていたので、宇宙と人間との直接的な関係について思索し、太陽、月、雨、雷などの自然物や自然現象から神を作り、やがて、この種の多神教が徐々に一神教に結実した、とコントは考えた。

ホール氏は更に、アストン氏の論文が、スペンサーやコントによって提示された理論と非常に重要な関連性を有すると考えた理由について、説明を進めた。アストン論文は、東洋と西洋双方の宗教的発達に平行線を示しており、特に、無生物に生命を認める（フェティシズム；呪物崇拜）のは宗教の初期段階であるというコント理論の追認において関連性を示しており、この同様な考え方がホメロスやヘロドトスの著作の中にも明らかにされている、とホール氏は指摘した。

この啓蒙的な論文の中で、アストン氏は宗教的発達に関して全く新しい視点から光を当ており、このような主題に取り組む彼のような優れた学者を見出し得るのは、稀有のことであると言わねばならない、とホール氏は発言を締め括った。

ハーディング・スミス氏（日本協会評議員）は、この主題は私にとって常に神秘の源泉であって、ほとんど発言することはないと思うが、今夜学んだことから神道は先ず純粋な自然崇拜の一形式であったが、後に自然物の模倣及び擬人化へと展開したように思える、と語った。しかしながら、神道は、後に仏教の先駆けへと発展すべき非常に非凡なものであって、ローマの農神祭からクリスマスが、また、サクソンのイースター女神の名前を復活させたものであるイースター〔復活祭〕の如く、多くの場合古い異教の儀式であったキリスト教の祝祭を思い起こさせる、と述べた。

しかしながら、ハーディング・スミス氏は、神道の本質に関しては未だ十分に満足していないので、アストン論文で神道の内面的意味をもう少し明確に説明して欲しかった、と述べた。彼は、天皇によって毎年開催される祭日があり、出席者のどなたかにその祭日が何であるかご教示戴けると有難い、と述べた。その祭日は、臣民を救済するための天皇の贖罪を意味するものであろうか。もしそうであれば、興味深い論点となるであろう、と論評してスミス氏は発言を終えた。

議長は、出席者の中で他に質疑がなければ、アストン論文に関連して2、3発言したい、と述べた。

議長は、神道の起源に関する従来の誤った解釈、すなわち、後の時代になって祖先崇

拝が神道信仰に入り込みその一部を形成したのは疑いもないが、神道が単なる祖先崇拝に過ぎないとする従来の立場、を払拭することにおいて本会議はアストン氏に多大の学恩を負うものである、と語った。アストン氏の考えでは、主神とも呼ぶべき太陽女神のアマテラスに対する崇敬は、単に古代太陽信仰の遺物に過ぎず、事実、伊勢神宮から程遠からぬ地でアストン氏は太陽信仰を実見していた。

伊勢の海岸線の小さな一角に、浜辺に建立された神社[二見興玉神社]があり、その神社を越えた海中に、ロープで繋がれた二個の垂直な岩[夫婦岩]があって、この神社は、太陽が湾の反対側の海岸線から昇る時、信者が供物を供えて遥拝すれば、海中の二個の垂直な岩の間に太陽が見えるような位置に建てられている。

議長は、アストン氏に伊勢と出雲にある神道信者の主要な神殿[伊勢神宮・出雲大社]について言及して欲しかったが、それらの神社は非常に簡素で、華麗な仏教寺院とは全く異なっている、と語った。実際、神社は全く簡素な素木が使われており、原始的な小屋の形に造られている。木材は塗装されず、二十年ごとに最も重要な神社は壊され、壊される前と寸分違わぬ形に再建される[式年遷宮]

議長は暫く出雲で過ごしたことがあり、かの地において、神道神殿は実際どのようなものであるかを実見する好機を得たが、伊勢よりさらなる自由度が許容されていることに気付いた。

次にガウランド教授が、神社に神饌〔飯〕を供える準備の過程について述べた。すなわち、柔らかい木の突き錐を分厚い板〔火臼〕の端に強く擦り付けて発火させ、この火臼を使って熾された火で米を煮立たせるのである。

日本人がこれらの神社に供える供物に関しては、古代では反物、絹、織物、それに農産物からなっていた。しかし現在では、供物は角ばった一連の紙きれ〔幣〕によって代用されている。

ガウランド教授はさらに、朝鮮を旅行していたとき、住民の宗教的儀礼の中に神道と一致する多くの儀礼に出会ったこと、また、峠道を越えた経験の中で、朝鮮の日雇い労働者がその地方の神々を宥めるために動物を生贄にすること、などについて話を進めた。旅の途中で豚が一頭ガウランド教授に贈られたが、この豚は屠殺されてその血は飲まれ、死体は神社に持って行かれて、儀式やお祈りの後、結局峠を越えた所で食べられた。

日本を旅行していたとき、高山地帯において、人々が一様に〔神〕棚に酒を少々供えて、その後それを取り下げて、自分たちも酒を飲む、ということにガウランド教授は気

付いた。

ガウランド教授は、宗教の起源に関するホール氏の雄弁なスピーチによって参会者の全員が大いに感銘を受けた、と謝辞を述べて発言を締め括った。ガウランド教授はまた、アストン氏の貴重な論文に対して心からなる感謝の決議を提議したい、と述べた。この提議は発声投票で通過した。

当日の会合は、議長に対する感謝決議の提議を以って閉会となった。

脚注

1 . 神道とは字義通り「神々の道」である。シントウイズム (Shintoism) という用語は、「道」と「イズム (信仰)」が同じことを意味するので、類語重複である。我々はイスラム教をイスラミズム (Islamism) ・ 武士道をブシドイズム (Bushidoism) とは言わない。

2 . この論文が発表された後、ミシェル・ルボンの重要な「神道論」が現れた。[欧米諸国の日本学研究者にとって、E.サトウ卿、B.H. チェンバレン氏、フローレンツ博士の著作が大いに役立つと同様に、ミシェル・ルボンの「神道論」も有用な著作であることを指摘している。]

おわりに

本誌第4号において、アストンの論文「神道3」の論文本体部分 (pp340 - 349) の翻訳を試み、本号において、同論文発表時における会議参加者の「討論」(pp349 - 351) 部分と脚注の翻訳を試みた。本論文 *Shinto* by W.G. Aston in *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London, Volume 7, 1908*. (「神道3」) の翻訳を思い立ったのは、アストンには既に同じ表題の先行著作2書、すなわち、*Shinto: The Way Of The Gods*, Longmans, Green & Co.: London, 1905. (「神道1」) 及び *Shinto: The Ancient Religion Of Japan*, Archibald Constable & Co. Ltd.: London, 1907. (「神道2」) があり、それぞれに日本語の翻訳書が存在しているからであった。

「神道1」について手元にある復刻版(Logos, 1968)を参照しつつ概略を述べると、同書は図版16葉を含む全14章・390ページに亘る大著である。収載されている図版は、大名持命奇魂問答の處、石窟幽居、二見浦、海の宮のホホデミ、削掛、大麻、御幣、絵馬、神輿、神籬(ひもろぎ)、伊勢神宮、鳥居、茅の輪、楔、追儼、野々宮の16葉である。内容に立ち入ることなく章題のみを列挙すると、以下の通りである。I章：神道研究のための資料、II章：一般的特徴 人格化、III章：一般的特徴 人間の神格化、IV章：一般的特徴 神々の機能、V章：神話、VI章：神話的物語、VII章：万神殿 自然神、VIII章：万神殿 人間神、IX章：聖職者、X章：礼拝、XI章：道德・法・清浄、XII章：儀式、XIII章：呪術・占い・靈感、XIV章：神道の衰退 現代の諸流派。

「神道2」について手元にある復刻版(UT Back-in-Print Service, 1997)によって概観すると、「神道1」に比べれば版型も小ぶりであってページ数も少ない。全体は9章・83ページからなっており、章題を示せば次の如くである。I章：序論、II章：神道の一般的性質、III章：神話、IV章：神々、V章：聖職者、VI章：礼拝、VII章：道德と清浄、VIII：占いと靈感、IX章：後代の歴史。本書は*Religions: Ancient and Modern*と題するシリーズの一冊として書かれたもので、その発行当時「アニミズム」、「汎神論」、「古代中国の宗教」、「イスラム教」を含む16冊を出版しており、さらに続刊を企画中であった。

「神道2」の巻末には2ページに亘って参考文献とも言うべき「神道選書」17冊が収載されているが、通常の書誌情報の外にアストンの短いコメントが付いている。「外国人による日本研究の白眉」(日本大百科全書)と賞賛されているケンペルの『日本誌』についても、「神道[研究]には無価値」と切り捨て、同様に、フォン・シーボルトの『日本』については、「初版出版時には意味があったが、神道に関する限り、後の著作に取って代わられた」と指摘している。日本びいきのラフカディオ・ハーンの著作『知られざる日本の面影』についても、「共感的な洞察力、賞賛すべき文体」と美点を認めた上で、「スベンサー理論の盲目的な受容、不完全な知識」と欠点を併記している。この3人(3冊)を例外として、残りの14冊については、「正確、神話研究には不可欠の書」、「日本紀の優れたドイツ語訳」、「強く推奨する」などの言葉が諸所に見られることから、これらのコメントは個人的な好悪の問題ではなく、アストンの学問的誠実さを示すものであるといえる。

将来、翻訳書も含めたアストンによる神道三著作ならびに神道関連の諸論文を精査して、アストンの神道観を明らかにしたい。

参考文献

- 小野祖教 『改訂増補・神道の基礎知識と基礎問題』 神社新報社、1988 .
- 片山博 「W.G.アストンの‘神道’に関する書誌について」『日本大学松戸歯学部一般教育紀要』
第22号 pp136 - 141、1996 .
- 亀田次郎 「國語學上に於けるアストンの功績」『國學院雜誌第拾八卷第壹号』（通卷二百七）
pp1-25、1912 .
- 國學院大學日本文化研究所（編）『神道事典』 弘文堂、1994 .
- 小学館編集部 『日本大百科全書』電子ブック版 小学館、1996 .
- 白石喜之助・山本節 共訳（W.G. Aston 著）『神道：日本の古代宗教』 新生堂、1930 .
- 補永茂助・芝野六助 共訳（W.G. Aston 著）『日本神道論』 明治書院、1922 .
- 三浦佑之 『口語訳・古事記〔完全版〕』 文芸春秋、2002 .
- 宮家準 『民族宗教と日本社会』 東京大学出版会、2002 .
- 安田一郎 訳（W.G. Aston 著）『神道』 青土社、1988 .

Aston, W.G., *Shinto: The Way Of The Gods*, Longmans & Co.: London, 1905.

Aston, W.G., *Shinto: The Ancient Religion Of Japan*, Archibald Constable & Co. Ltd.: London, 1907.

Aston, W.G., *Shinto in Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, Volume 7, 1908.